

夢を紡ぐ
未来を織りなす風・林・火・山

林の章

～時代を紡ぐ～

武田八幡宮

鎮守の森の中で、厳かな雰囲気漂わせ佇む武田八幡宮。現存する本殿は、武田信虎が起工し、信玄が造営したもの。室町時代の特色ある建築で、内壁に金箔が貼られ、柱は朱塗りになっているなど、贅をこらした装飾が、総頂期の武田家の隆盛のほどを彷彿とさせます。

武田の里

甲斐武田家発祥の地であり、終焉の地でもある「武田の里にらさき」。市内に残された史跡や文化財は、静かに時を刻みながら、繁栄と滅亡の歴史を今に伝えています。

甲斐武田家の祖

武田太守信義公ゆかりの地



初代当主
信義の像

戦国時代、大勢力を築いた甲斐武田家。その祖は、清和源氏の流れをくむ甲斐源氏の始祖、新羅三郎義光の曾孫、源信義と言われています。大治3(1128)年8月15日に生まれ、13歳のときに武田八幡宮で元服。以後、武田太守信義と名乗り、武田八幡宮は武田家の氏神となりました。平安末期、武運に優れた信義は甲斐源氏の棟梁となり、一門を率いて二谷の戦いや屋島の戦い、壇ノ浦の戦いなどにも参戦して、功績を修め、鎌倉

幕府の成立に貢献します。しかし、その強さが災いし、頼朝から脅威とされ疎れたため、晩年は不遇であったと伝えられます。

かつて武田の庄と呼ばれた信義の所領は、現在の神山・旭・大草・竜岡周辺にあたります。豊かに広がる田園風景のなかに佇む館跡や菩提寺である願成寺が、兵どもが見た壮大な夢を、今に生きる私達に伝えています。



時を超え、まちを見守ってきた(武田八幡宮石鳥居)



魔除けの鬼意匠(武田八幡宮本殿)



武田八幡宮拝殿

夢を見守りつつづけて



新府城跡

戦国時代の名門武田家の最後の城。数々の防衛策を施した、甲州流築城術の集大成とも言われます。本丸の跡地に立つと、この地が、七里岩の地形を活かして要となる場所を一望のもとに擁することが出来た場所だったことがわかる、歴史的景観が広がります。



武田八幡宮本殿

壮大なロマンの息づく場所

甲斐武田家発祥の地である韮崎は、昔も今も、武田家にとって最も重要な場所。始祖である信繁公の菩提寺、代々の当主が長久と繁栄を祈願した武田八幡宮など今も残る縁の深い寺社や、勝頼公も眺めたであろう新府城跡からの自然豊かな風景などに、天下取りに挑んだ武田家の壮大なロマンを感じていただけたらありがたいですね。



武田 邦信さん

Profile

武田家宗家当主。信玄公から数えて16代目に当たる。「武田の里・サッカーのまちにらさき ふるさと大使」としても活躍中。

終焉を見守った悲劇の城

信義から数えて16代目の当主が、戦国最強とも称される武田信玄です。戦国の世にあつて、甲斐地方の覇者として君臨しましたが、天下統一の夢は叶わず、その息子である勝頼もまた天正3(1575)年の長篠の戦いで織田・徳川連合軍に大敗を喫すると、体制を立て直すため、60年にわたって本拠地だった躰躰ヶ崎の館を離れることにします。勝頼が防御に優れた地形であるとして新天地を選んだのが、古くからの交通の要衝として栄えてきた韮崎の、「西の森」と呼ばれていた七里岩台地の末端の地でした。真田昌幸(幸村の父)を普請奉

行に命じ、約1年で作らせた新たな城は「甲斐の国の新しい府中」であることから、新府城と名づけられました。天正10年12月24日頃に、家族や家臣と共に完成したばかりの新府城に移った勝頼でしたが、翌年3月3日には織田勢に攻められ、城に自ら火を放つて、わずかな家臣と共に落ち延びることになります。勝頼の在城は、わずか70日余り。悲劇の城、新府城は、近年の調査により、地形を活かし工夫を凝らした防御策の施された、優れた城であったことがわかっていきます。



お新府さん

新府城本丸跡に、勝頼の霊を祀った藤武神社の例大祭。祭りのハイライトは、249段の石段を一気に駆け上がる神輿渡御。新府桃源郷に咲き誇る桃の花が、祭りを鮮やかに彩ります。

甲州街道 葦崎宿

江戸日本橋を起点に定められた五街道のひとつ。信濃国下諏訪宿で中山道と合流するまで、45の宿場が置かれました。葦崎はその38番目の宿場にあたります。

夢を紡ぐ
未来を織りなす風・林・火山

林の章

と き
～時代を紡ぐ～



江戸時代の旅装束

士農工商の身分制度が確立していた江戸時代。旅姿にも、身分や肩書を象徴するスタイルがありました。また、「道中案内記」や「道中日記」を参考に、商用や参詣など旅の目的に合わせて、出来る限り荷を軽くする工夫をしたと言われます。

街道のまち

甲州街道、駿府往還、佐久往還という3つの主要な交通路の分岐点にあたる葦崎は、古くから交通の要衝であり、峡北地方の中心地でもありました。

葦崎宿の面影

江戸幕府によって甲州街道が整備されると、38番目の宿場がおかれ、街道沿いに(現在の本町通り)本陣と17軒の旅籠が軒を連ねて、伝馬や旅人、行人を迎えました。また、宝暦3(1753)年に一ツ橋家の陣屋が置かれてからは、行政の中心としても発展しました。

さらに、天保6(1835)年には、釜無川を引き入れて河岸が設けられます。船山河岸ができたことで、鰍沢止まりだった富士川舟運は葦崎まで延長され、江戸城に納める年貢米や雑穀を「上げ米」



馬つなぎ石
中馬稼ぎや行人が、穴に手綱を結んで馬をつなぎ、運ばせてきた荷物を店内に運び入れたと言われる石。かつては商店や問屋の両脇にありました。

今ではきれいに舗装され、整備された本町通りですが、江戸時代から続く旅館や商店、店先の馬つなぎ石などが、往時の面影を伝えています。



鋸刃状のまちなみ
道に並行ではなく、斜めに間口がある本町通りの家々。そのまちなみは鋸の刃に似ています。「家の前に荷を置く場所が必要だった」「強風によるほこりや馬糞を防ぐため」など、その理由にはいくつかの説があります。



船山河岸の碑
1607(慶長12)年、富士川が開削され、富士川舟運が始まってから230年近く後の1835(天保6)年、船山河岸が築かれ、葦崎が終点となりました。



鰍沢横丁
船山河岸と宿場を結ぶ道。沿道には駄菓子屋や馬方茶屋が軒を連ね、物資の集散地として賑わいました。



一橋陣屋址
徳川御三卿と称され、御三家に次ぐ將軍継承権を与えられていた一橋家。甲斐国に所有する3万石の統治のため、1753年から1794年まで葦崎に陣屋を置きました。



葦崎宿本陣の跡
甲州街道を参勤交代に使用したのは、信濃高遠藩、高島藩、飯田藩の3藩のみ。しかも、日程の関係で葦崎に宿泊することは減多に無かったため、本陣は問屋が兼務していました。

どれほどの人や馬が往来したのかと
往時に思いを馳せながら、
歴史をたどって見つけたのは
時を超えて守っていく大切なもの。

五海道其外延絵図 甲州道 巻第7
(葦崎一ヶ原) [東京国立博物館蔵]より

江戸幕府が五街道の状況を把握するために、道中奉行に命じて作らせた詳細な絵地図。「甲州道 巻第7」の、葦崎から台ヶ原への絵図には、旅人の前に聳える断崖絶壁の七里岩の姿が描かれています。



まちなみを鮮やかに彩る“のれん”

モダンなデザインや鮮やかな色彩で、現代のまちなみに華やかさと賑わいを演出。お店のイメージも一新し、葦崎の新たな魅力となりました。

夢をカナエル・カエル ～歴史がいきづくまちづくり

戦国の名将 武田信玄を生んだ武田家との深い関わりや、古くから交通の要衝として栄えてきた歴史は、葦崎の財産。大切に守りつつ、これからのまちづくりにも活かしていきたいね。



現在、葦崎の商店街を歩くと、商店や飲食店、銀行にも、「のれん」が掲げられているのに気づきます。これは、「のれんを掲げて宿場町の賑わいを取り戻そう」と商店



宿でも、家紋や文字を入れたさまざまな「のれん」が華やかに街並みを彩り、街ゆく人の目を楽しませたと伝えられます。

気になる「のれん」を見つけたらぜひくぐってみてください。きっと、懐かしい笑顔との出会いが待っています。

「のれん」の まちなみ のれんをくぐった向こうには、 おもてなしの笑顔が待っている。

のれんが作る、まちなかミュージアム

ひらひらと手招きしているかのように店先で揺れる「のれん」。その起源は縄文時代の日よけにあると言われ、平安時代には庶民の日用品として、雨風避けや部屋の仕切りに使われました。現在のように商売道具の一つとして店先を飾るようになったのは、室町時代になつてから。江戸時代には葦崎宿でも、家紋や文字を入れたさまざまな「のれん」が華やかに街並みを彩り、街ゆく人の目を楽しませたと伝えられます。

街の皆さんが、市や商工会と一緒に進めている活動で、市内160店舗が参加しています。店先を飾るのは、思いや心意気を込めて店主がデザインした、世界でただ一つだけの「のれん」。色も形もデザインも、ひとつひとつ違っていて、ずらりと並んだまちなみは、あたかもミュージアムのようにです。